

みんなの農業

農作業メモ 水稻

長島営農センター 伊藤



この記事に関するお問い合わせは、
営農指導課 ☎059・393・3620 まで。
資料についてのお問い合わせは、最寄りの各営農（総合）センターまで。

今年の収穫結果はいかがでしたでしょうか。夏の異常気象の影響で、稲の生育やお米の品質に不安を感じられた方も多いのではないのでしょうか。気象条件は年によって変わりますが、今後も高温下での栽培が想定されるため、今月は水稻の高温対策についてご紹介します。

令和7年6月～8月の気象について

今年の夏は6月時点から気温が高く、6～8月を通して平均気温が高く推移しました。また、7月以降最高気温が35℃を超える日が多く、梅雨明けからは雨が少なく、高温少雨の夏となりました。

高温による稲への悪影響

光合成に適した気温は25℃前後です。25℃を超えると徐々に光合成によるデンプンの生成量が減少し、逆に呼吸によるデンプンの消費量が増加します。結果、デンプン不足となり背白粒や基部未熟粒などの白未熟粒が発生します。また、高温により土中の窒素成分が早く溶出してしまい、登熟期に必要な窒素も不足してしまいます。

白未熟粒の発生メカニズム

- ① 異常高温による光合成速度の低下、呼吸速度の上昇
- ② デンプンの生成量が減下し消費量が増加
- ③ 籾に蓄積するはずのデンプンが不足
- ④ 玄米の中に空洞ができる

- ⑤ 光が玄米の中の空洞を通ると乱反射する
- ⑥ 玄米が白濁（白未熟粒の発生）

高温対策

① ケイ酸の補給

ケイ酸には稲体の温度を下げる効果があると言われています（クーラー効果）。しかし、JAみえきた管内のケイ酸含有量の平均値によると目標値には達しておらず、三重県の平均値と比較してもわずかながら下回っています。不足しているケイ酸を含んだ土壌改良資材を施用しましょう。秋冬の施用でも次年作での効果は期待できます。

けい酸加里 プレミア34

元肥施肥（稲刈り後～代掻き前）
40～60 kg / 10 a
中間追肥（出穂45～35日前）
20～40 kg / 10 a



▶ けい酸加里プレミアム34

② 水管理

出穂期以降の水管理は間断灌水が理想的です。今年のような少雨時は入水が困難ですが、落水期までできる限り田面が乾くことがないよう、水管理することが高温対策につながります。異常高温が続く年は無理のない範囲で高温対策を行い、品質の維持と向上につとめましょう。